



累計85万部のヒットの背景に、
現役SEという「基盤」がある

よしたに氏

漫画家・イラストレーター・システムエンジニア

YOSHITANI

1978年生まれ。2001年、神奈川県
の大学を卒業し、IT系企業
に就職。SEとして働きながら、
自らの経験をもとに描いた漫画
『ぼく、オタリーマン。』を出版。
現在も現役SEとして活躍中。
その他の作品に財務省PV『大
臣になった男』『全国フードテ
ーマパークガイドブック』（ブッ
キング社）など。現在、Yahoo!
オフィシャルブログ『エンジニア
★流星群 @Tech総研』で『理
系の人々』を好評連載中。

CAREER CRUISING

キャリア・クルージング

Interview = 大久保幸夫、入倉由理子
Text = 入倉由理子（46～48P）
大久保幸夫（49P）
Photo = 鈴木慶子

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。
人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探するため、
各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

ビジネス書のカテゴリから出たマンガが、累計85万部という異例のヒットを飛ばしている。その名は『ぼく、オタリーマン。』『理系の人々』。SEである主人公の日常を日記的に描いたこのマンガの著者自身が、現役SEだ。マンガ家としてベストセラー作家となった現在も、あくまでSEとの「二足のワラジ」を貫く。2つの仕事を持つに至った道のりについて話を聞いた。

よしたに氏 キャリアヒストリー

- 1978年 0歳 長野県に生まれる
- 1985年 6歳 小学校に入学。趣味は「落書き」と「読書」という少年時代を過ごす
- 1993年 15歳 家庭の都合で引っ越し
- 1994年 15歳 高校に入学。中学時代の転校が影響し、友だちがなかなかできなかった。ライトノベルを投稿していた時期
- 1997年 18歳 大学理工学部情報科学学科に入学。マンガは描き続けたが、あくまで趣味
- 2001年 22歳 大学を卒業し、システム開発会社に入社。SEとなる。ほぼ同時期に、「ダンシング☆カンパニイ」という日記形式のサイトを立ち上げ。マンガの絵日記もアップするようになる
- 2004年頃 アクセスが増え、ネット内での知名度が上がる
- 2007年 29歳 『ぼく、オタリーマン。』を出版。発売1カ月で30万部を記録。9月には『ぼく、オタリーマン。2』を出版
- 2008年 30歳 3月に『ぼく、オタリーマン。3』、10月に『理系の人々』を出版。現在も会社勤務を続ける



兄とともに。
右がよしたに氏



既に絵を描くのが大好きだった。よしたに氏は前列中央



友だちも増え「楽しかった」という大学時代



マンガは趣味。ふつうに社会人生活も謳歌している



美大一本に絞るのが怖かった。 選択を「先送り」し理工学部に進学

物心ついたときから、時間の多くを「落書き」と「読書」に使っていた。よしたに氏はそう振り返る。

「テストで解答は全部正解なのに、先生から0点をもらったことがありました。それは度重なる注意にもかかわらず、解答を終えて余った時間に、裏に落書きを続けていたから（笑）。それくらい、好きだったんですね」

中学に入る頃にはほんやりと「マンガ家になりたい」という気持ちが芽生え、少しずつ投稿を始めた。その後、中学3年生で家族の都合で引っ越し。見知らぬ土地で友だちがなかなかできず、よしたに氏にとって「冬の時代」が訪れた。それは、高校を卒業するまで続く。

「その頃はマンガだけではなく、ライトノベルを投稿していましたね。当時、明るくて人気があって、勉強ができて、絵もうまい。そんなクラスメイトがいました。彼と比較して、どこかで自己顕示欲が強かった僕は、外からの評価が何かほしかったのかもしれない。僕が作ったモノが、世に出ればいいなあと思っていました」

一方で、なかば「諦め」もあった。大学進学時、「美大に行くのは特別な人」「マンガ家になるには、18歳では遅咲き」と思い込んでいた。美大や専門学校に進んで失敗したらツブシが利かない。そんな不安もあって、理工学部情報科学学科への進学を選んだのである。

「ゲームやパソコンも好きで『これからコンピュータでできるようになることはどんどん増えるんだろうな』と思うと興味がわきました。まあ、結局は美大一本に絞るのが怖かっただけ（笑）。選択の保留は悪い癖ですね」

大学生になって、高校のときとは一変、友だちは増えた。それでもマンガは描き続けていたが、「いつか会社にふつうに就職するんだろう」と考えていた。周囲が就職活動を始め、自らが描いた「既定路線」に則って、シ

STEM開発会社数十社を受けた。「安定していそう」「アットホームな雰囲気」なところが気に入って、現在勤務する会社に入社。SEとしての道を歩き始めた。

絵日記をネットにアップして評価を得る 仕事で多忙でも、描き続けた

入社は2001年。就職してすぐ、仕事の傍ら、「ダンシング☆カンパニー」というサイトを立ち上げた。最初は文章主体のサイトだったが、そのうち、「絵日記」的なマンガをアップするようになった。

「文章だけのページよりも、ずっと反応がいい。更新頻度を高くすると、アクセス数がまたアップして、ネットの中でどんどん知名度が上がっていく。趣味の領域ではあったけれど、それがうれしかったですね」

自分の作ったモノが客観的に評価してもらえる。SEは定時に終わる仕事ではないが、深夜に帰宅し、へとへとに疲れていても「趣味」の手が止まることはなかった。

デビューのきっかけは、偶然のようなものだった。ネット上で知り合った「絵日記サイト」の管理人数人が、居酒屋で飲むことになった。最初は頻繁ではなかったが、数年のうちには3カ月に一度は飲む仲になった。

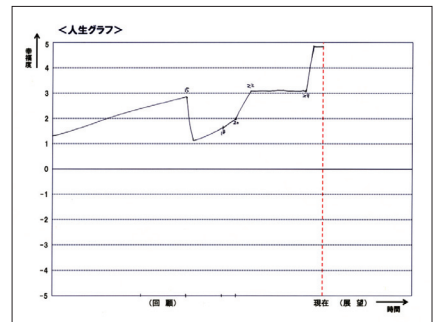
「その頃ようやく、お互いの職業を知りました。そして、そのうちの1人が中経出版の編集者だったんです」

「食べるため」に仕事の質を下げたくない いい作品を生み出すにはいい環境

中経出版といえば、ビジネス書を得意とする出版社であり、マンガとは無縁だった。それでも、自分のサイトよりもアクセス数の少ないサイトの管理人が次々と本を出版するのを羨望の眼差しで見ていたよしたに氏は、その編集者に思い切って相談した。果たして07年3月、『ぼく、オタリーマン。』は世に出ることとなった。



「孤独」な高校時代が最もつらかった。その後は友だちも増え、趣味と仕事の両立により満足度の高い「人生グラフ」となっている。



出版不況といわれる逆風の中、出版した4冊の累計が85万部とは驚くべき数字だ。それでも「会社を辞めるほどのインパクトはない」と、よしたに氏は言う。

「最近ではマンガの仕事のボリュームが大きくなって『両A面』のCDのような状態。忙しいけれど、SEの仕事も好きなんです。システムは形の決まった商品ではなく、僕の仕事を誰かが評価してくれて、そこに価値が生まれる。どこかマンガの仕事と似ているんでしょうね」

「サラリーマン」である自分と「マンガ家」である自分は、あくまできっちり線を引く。そして、かかわる人が多いだけに、会社の仕事が忙しいときにはマンガの出版を遅らせて、SEの自分を優先することも多い。

「土日にストーリーを考え、夜中に絵を描く。僕は描くのが早いから、SEの仕事との両立も可能なんです」

聞けば聞くほど、ハードな生活である。しかし「それぞれの仕事で、それぞれの仕事のストレス解消になっている」というから、本人にとっては、「つらい」「厳しい」といった種類のものでもなさそうだ。

「いつまでマンガで食っていけるかわからない」という不安も、彼の根底に変わらず存在する。これもある意味、本人の言うところの「選択の先送り」なのかもしれない。

とはいえ、2つの仕事を持つのは、「お金」への執着からではない。「印税が入っても、増えたのは仕事道具だけ」と言うくらいだ。SEは好きな仕事であり、同時に大切な生活の基盤である。そして、それは大好きなマンガを描き続けるための手段でもある。

「人気って、一過性のものであることが多いですから、それが過ぎ去ったときに怖いですよ。それに、もしマンガ家一本に絞ったら、お金のためにひたすら量をこなして、質を下げることもなりかねない。食べるために手を抜くのは嫌なんです。だから今の状態が、高い質の作品を生み出すにはいい環境なのかもしれません」

■ よしたに氏のキャリアをこう見る

エンジニアとマンガ家 2つの自分を演じ分けるキャリア

大久保幸夫

ワークス研究所 所長

2つの仕事を持つ、ということは、経済が成熟していない社会では当たり前のことである。たとえば、昼間は会社に勤め、夜はタクシードライバーをするというようなことである。これをマルチプルジョブホルダーという。目的はもちろん収入。1つの仕事では食べてゆけないから、複数の仕事を掛け持ちする。好き好んでいくつもの仕事をしているわけではない。

経済が発展してくると、賃金が高まり、1つの会社に勤めることで生計が成り立つようになる。それに伴い、会社は業務に専念することを求め、それ以外の業務によって収入を得ることを禁止しようとする。副業の禁止である。現在の日本の姿といえるだろう。

しかし、さらに社会が成熟してくると、再び2つの仕事を持つ人は増えてくるようだ。いわゆる「ダブルキャリア」である。

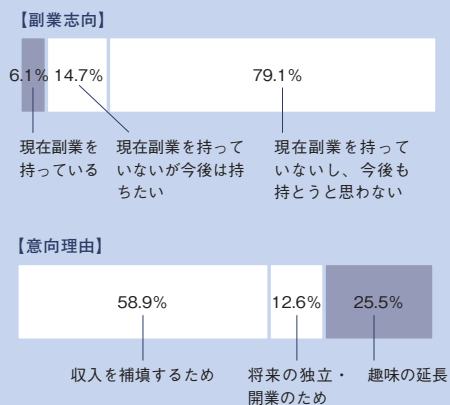
よしたに氏のケースは、まさしくこれである。エンジニアの仕事や収入に不満があるわけではない。学生時代に一度は封印した「マンガ家」という夢を、何も捨てずに、何のリスクもなく実現してしまっただけなのだ。

『ダブルキャリア——新しい生き方の提案』(荻野進介・大宮冬洋著)では、このタイプを、相乗効果型ダブルキャリアと名付けている。「それぞれの仕事それぞれの仕事のストレス解消になるんです」とよしたに氏は言う。そのうえエンジニアの仕事は、浮き沈みの激しいマンガ家という仕事のリスクヘッジになっているとも。

エンジニアもマンガ家もそれぞれたくさんいるが、2つともできる人となると極端に少なくなる。ダブルキャリアの魅力はその希少性にあるともいえるだろう。

面白いのは、エンジニアが描くマンガという要素が溢れていることである。テーマはもちろん、制作プロセスも「プロジェクトマネジメントの手法を使って」組み立て、先にコマ割りを決め、設計をもとに描く。「最も生産性の高い道順を目指してプロセスを改善しながら」「マウスをクリックする回数が最も少なくなるように」描くというのだ。よしたに氏は『理系の人々』を地で行く、システムエンジニアリングイラストレーター(?)なのである。

趣味の延長を副業にしている人は100人に1人



リクルートワークス研究所「ワーキングバーソン調査2008」
 ※副業志向には0.1%、意向理由には3%の無回答があり、上記グラフはそれを除いている。